

謙讓の補助動詞の考察

桑畑 千恵子

序

「きこゆ」「きこえさす」「まうす」「まゐらす」には、本来の語義を失い、さまざまな動詞を承けて、その動作の対象をうやまう補助動詞用法がある。

謙讓の補助動詞は、11世紀後半を境にして、「きこゆ」「きこえさす」に変わって、「まゐらす」が使用されるようになるなど、用法に変化があらわれる。

「きこゆ」「きこえさす」「たてまつる」「まうす」「まゐらす」の各語の歴史について、森野宗明氏は『講座国語史五 敬語史—古代の敬語—』（大修館書店）の中で次のように述べておられる。

「きこゆ」「きこえさす」「たてまつる」「まうす」「まゐらす」には、本来の語義を失い、さまざまな動詞を承けて、その動作の対象をうやまう補助動詞用法がある。中古の和文系作品でもっとも使用量が大きく、圧倒的に他を引き離しているのは

「きこゆ」「きこえさす」の「きこゆ」系の語と、「たてまつる」である。両者には交錯はみられるし、特に一一世紀後半あたりではその度が強まるが、かなりくっきりした、承接する動詞との間における親疎性面での対立があり、例えば、「思ふ」「見す」等精神活動を表す動詞には「きこゆ」系が、「見る」「見す」「入る」（下二段）等身体的動作を表す動詞には「たてまつる」が用いられるという傾向が認められている。

「まうす」の補助動詞用法は局限されており、和文系の作品ではまことにすくなく、神仏を客体とする動作、下級官庁・部局・官人から上級官庁・部局・官人へ向けて行われる動作、主従関係といった身分上の格差が極端に大であり、その支配下に隷属しているものとしてとらえられる客体に対する下位者の動作等の叙述に集中している。

「きこゆ」系の補助動詞用法は11世紀後半から衰

微してゆき、その衰微と表裏して「まゐらす」が伸張する。「まゐらす」が活発のきざしをみせる段階での用法をみると、最高敬語としての性格を具え、「思ふ」関係では、「きこえさす」と、「見る」関係では「たてまつる」と競合する状態にあり、やがてかなり広範囲の動作表現に使用されてゆく条件を具備していた。

一二世紀では、補助動詞による謙讓表現は、「たてまつる」「まゐらす」「まうす」が微妙に交錯しながら、大きく揺れてゆくことになる。

ここでは、以上の各語の歴史を考え、『堤中納言物語』を中心に、一一世紀前半から一二世紀前半にかけての作品を取り上げながら、各語の用法について考察してみたい。

作品については、『紫式部日記』『堤中納言物語』『四条宮下野集』『讃岐典侍日記』の四作品を取り上げる。

本文で用いたテキストは次の通りである。

「紫式部日記」 中野幸一校注 日本古典文学全集
小学館

「堤中納言物語」 稻賀敬二校注 日本古典文学全集
小学館

「四条宮下野集 本文及び総索引」 久保木哲夫編

笠間書院

「讃岐典侍日記」 石井文夫校注 日本古典文学全集
小学館

本論

一、各々の語の時代的変遷

はじめに、補助動詞「きこゆ」「きこえさす」「たてまつる」「まうす」「まゐらす」がどのように四作品に現れているかを概観する意味から、用例数を表1に掲げておく。表から、『紫式部日記』『堤中納言物語』では「まゐらす」が用いられず、『紫式部日記』では「まうす」も用いられない。

『四条宮下野集』では「きこゆ」「まゐらす」は両方とも用いられており、「きこえさす」が用いられていない。

『讃岐典侍日記』では「きこゆ」「きこえさす」「まうす」が用いられておらず、圧倒的に「まゐらす」が多く用いられている。

「たてまつる」については、四作品すべてに用いられているが、用いられている割合に変化がみられ、『紫式部日記』『堤中納言物語』ではそれぞれ62%、63%と6割程度みられるが、『四条宮下野集』では13%、『讃岐典侍日記』では4%とかなり少なくなっている。

これらのことから、『四条宮下野集』を境にして、謙讓

の補助動詞の用法に変化が見られるようである。

表 I

		地の文		会話文		合計	
			%		%		%
1	きこゆ	14	93%	1	7%	15	30%
	きこえさす	4	100%	0		4	8%
	たてまつる	27	87%	4	13%	31	63%
	まうす	0		0		0	
	まゐらす	0		0		0	
2	きこゆ	12	67%	6	33%	18	33%
	きこえさす	1	100%	0		1	2%
	たてまつる	12	34%	23	66%	35	63%
	まうす	0		1	100%	1	2%
	まゐらす	0		0		0	
3	きこゆ	4	100%	0		4	27%
	きこえさす	0		0		0	
	たてまつる	1	50%	1	50%	2	13%
	まうす	4	100%	0		4	27%
	まゐらす	1	20%	4	80%	5	33%
4	きこゆ	0		0		0	
	きこえさす	0		0		0	
	たてまつる	2	50%	2	50%	4	3%
	まうす	0		0		0	
	まゐらす	79	71%	32	29%	111	97%

1 紫式部日記 2 堤中納言物語 3 四条宮下野集 4 讃岐典侍日記

二、各作品における謙讓の補助動詞

1、各作品の成立年次

『紫式部日記』は『源氏物語』の作者紫式部の日記である。日記の成立時期については寛弘七年（一〇一〇）年三月三十日以後、七月十一日以前の夏ごろの執筆と推定されている。（註1）

『堤中納言物語』は十編の短編と一つの断章から成り、

これらのことから、『四条宮下野集』を境にして、謙讓

その各々にその数と等しい作者がおり、成立年時も中古から中世にかけて分散しているのが定説である。作者と成立年次のはっきりしているのは「逢坂越えぬ権中納言」の一編だけで、陽明文庫蔵「類聚歌合」の発見から、この作品が小式部という一女房の手によって、天喜三年（一〇五五）五月三日、裸子内親王家の物語合に出されたことが明らかになった。（註2）

『四条宮下野集』は四条宮（後冷泉天皇の皇后である藤原頼通の娘寛子は「四条宮」と通称された。）に仕え、下野と呼ばれた源政隆の娘の歌集であり、延久二年（一〇七〇）頃の成立と推定されている。（註3）

『讃岐典侍日記』の作者は藤原頼綱の娘長子である。作品のはっきりした成立年時については諸説あるが、一一〇九年から一一一〇年頃までの間に成立したものと考えられている。（註4）

2、待遇関係

各作品にあらわれた謙讓の補助動詞の、待遇関係について、受手を基準にして表を作ると、次のようになった。

受手の身分については、テキストに従った。また、官職名で表わされているものは、『新 国語要覧』（大修館書店）の官位官職相当一覧により、官職にあわせて位階を決めた。

表III 堤中納言物語 待遇関係表

	きこゆ		きこえさす		たてまつる		まうす	
	地	会	地	会	地	会	地	会
皇族		3				4		
一位・二位								
三位	4	1	1			2		1
四位	1				1	4		
五位	4							
姫君	3	1			11	6		
女房		1						
その他						7		
合計	12	6	1		12	23		1
	18		1		35		1	

表II 紫式部日記 待遇関係表

	きこゆ		きこえさす		たてまつる	
	地	会	地	会	地	会
皇族	7		3		22	4
一位					1	
二位	3	1			4	
三位	2					
その他	2		1			
合計	14	1	4		27	4
	15		4		31	

表V 讃岐典侍日記 待遇関係表

	参らす		たてまつる	
	地	会	地	会
皇族(堀河帝)	56	23	2	
(堀河帝以外)	15	1	1	
一位				
二位	5			
三位	1			
女房		7		1
その他	2	1		
合計	79	32	3	1
	111		4	

表IV 四条宮下野集 待遇関係表

	きこゆ		たてまつる		まうす		参らす	
	地	会	地	会	地	会	地	会
皇族					2			1
一位								
二位								
三位			1		2		1	2
四位	1			1				
女房	3							1
その他								
合計	4		1	1	4		1	4
	4		2		4		5	

「きこゆ」は「紫式部日記」においては、地の文で皇族に対して用いられることもあり、ある程度高い敬意を表わ

している。しかし、表からもわかるように、『堤中納言物語』や『四条宮下野集』においては、『紫式部日記』に比べると、受手の身分が低くなり、受手の身分の幅が広がっている。『讃岐典侍日記』においては、「きこゆ」の用例はみられない。

「きこえさす」は『紫式部日記』においては、一般に言われているように、「きこゆ」よりも敬意が高かったと考えられる。『堤中納言物語』においては用例が一例しかないため、はっきりとしたことは言えないが、『紫式部日記』と比べると、それほど敬意が高いとは考えられず、また、『四条宮下野集』や『讃岐典侍日記』には用例が見当たらない。

「たてまつる」も「きこゆ」と同じように『紫式部日記』ではある程度高い身分の人々に対して用いられているが、『堤中納言物語』や『四条宮下野集』においては受手の身分が低くなり、受手の身分の幅も広がっている。「たてまつる」は『讃岐典侍日記』にもみられるが、「まゐらす」三例に比べてその用例は四例と少なく、また、皇族に用いられたり、女房に対して用いられたり、「紫式部日記」に比べると、敬意が高いとはいえない。

「まうす」はもともと、和文系の作品には用例が少ないとされており、『紫式部日記』と『讃岐典侍日記』には

に対して用いられることもをり、ある程度高い敬意を表す

用例は見当たらない。それに比べると、『堤中納言物語』では「逢坂越えぬ権中納言」の中に一例みられ、『四条宮下野集』では合計十五例中四例もみられる。

「まゐらす」は、『四条宮下野集』と『讃岐典侍日記』に用例がみえ、特に『讃岐典侍日記』では三例みられ受手の身分も幅が広がっている。

これらのことから、一般に言われているように、「きこゆ」「きこえさす」にかわって「まゐらす」が用いられるようになったことがわかる。また、「きこゆ」「きこえさす」が衰えて、「まゐらす」がとってかわるまでの間、本来は「きこゆ」などが用いられてもよいような場面で、「まうす」が用いられているなど、かなり謙譲の補助動詞用法が揺れ動き、変化をみせていたと考えられる。

3、上接語

「きこゆ」と「たてまつる」との間には、上に来る動詞の性質によって使い分けられるという傾向が認められている。和田利政氏は論文の中で次のように述べておられる。(註5)

補助動詞「聞ゆ」及び「奉る」のあらわれる用例を見渡すと、この語は、表わす敬意の軽重や、会話文の場合の話手の位相などには関係なく、上に来る動詞の性質によって使い分けられていることがわかる。

表VI 紫式部日記 上接語

	2.1		2.3			合 計	
	%		精神	%	行為		%
きこゆ			8	53.3	7	46.7	15
きこえさす	2	50.0	1	25.5	1	25.0	4
たてまつる	8	30.8			18	69.2	26

表VII 堤中納言物語 上接語

	2.1		2.3			合 計	
	%		精神	%	行為		%
きこゆ	2	11.8	5	29.4	10	58.8	17
きこえさす	1	100					1
たてまつる	13	44.8	2	6.9	14	48.3	29
まうす			1	100			1

表VIII 四条宮下野集 上接語

	2.1		2.3			合 計	
	%		精神	%	行為		%
きこゆ	1	33.3	1	33.3	1	33.3	3
たてまつる			1	50.0	1	50.0	2
まうす	2	50.0	1	25.5	1	25.5	4
参らす			1	50.0	1	50.0	2

表IX 讀岐典侍日記 上接語

	2.1		2.3			合 計	
	%		精神	%	行為		%
たてまつる	2	50.0			2	50.0	4
参らす	27	27.8	18	18.6	52	53.6	97

原則I、「す・さす」「る・らる」からは「奉る」

がつく。

II、「見る」「聞く」などには「奉る」がつく。

III、サ行変格活用の動詞には「奉る」がつく。

IV、「奉る」のつく動詞は多く動作を表す動詞であり、「聞ゆ」のつく動詞は多く心の働きを表す動詞である。

この説を参考にしながら、上接語を『国立国語研究所資料集 六』の分類語彙表に従って分類した結果が、以下の表である。同語彙表は現代語を対象としたものであるが、ここではそのまま古代語に適用した。

二・一は抽象的人間関係（人間や自然のあり方の枠組み）を表し、二・三は人間活動（精神及び行為）を表す。また動作を表す動詞と心の働きを表す動詞とを分ける意味から、二・三をさらに精神と行為とに分けた。

上接語は動詞のみの数で、助動詞は除いてある。そのため、各語の合計の数は、表Ⅰの合計とあわない場合がある。

『源氏物語』においては、「きこゆ」と「たてまつる」の接続する動詞は原則として異なると言われている。表より、『紫式部日記』では、「たてまつる」は行為を表す動詞にも接続している。「きこゆ」は精神を表す動詞にも、行為を表す動詞にも接続しているが、少しだけ、精神を表す動詞の方に多く接続している。これらは、先に述べた『源氏物語』における傾向とだいたい同じである。また、抽象的人間関係を表す動詞には「きこゆ」は接続せず、「きこえさす」と「たてまつる」が接続している。

『堤中納言物語』では、「たてまつる」は精神を表す動詞よりも行為を表す動詞の方に多く接続している。これは、『源氏物語』と同じ傾向であるが、「きこゆ」が行為を表す動詞にもかなり多く接続しているなど変化もみられる。また、『紫式部日記』と違い、「きこゆ」が抽象的人間関係を表す動詞にも接続している。これらのことから、『源氏物語』や『紫式部日記』などに比べると、謙譲の補助動詞用法に変化がみられる。

『四条宮下野集』では、用例が少ないにもかかわらず、謙譲の補助動詞用法に、かなりバラツキがみられる。「きこゆ」「たてまつる」「まうす」「まゐらす」の四語は、

精神を表す動詞にも行為を表す行為にも半分ずつ接続しており、抽象的人間関係を表す動詞には、「きこゆ」「まうす」の二語が接続している。待遇関係と同じように上接語においても、この作品では、謙譲の補助動詞用法に大きな変化がみられる。

『讃岐典侍日記』では、ほとんどが「まゐらす」が接続している用例であるが、抽象的人間関係を表す動詞にも、精神を表す動詞にも、行為を表す動詞にも、極端に偏ることなく接続している。「たてまつる」は用例が少ないが、抽象的人間関係を表す動詞と、行為を表す動詞に接続しており、『紫式部日記』などと同じような傾向を表している。この頃になると、謙譲の補助動詞用法も、ある程度落ちついてきたのではないかと考えられる。

結び

「きこゆ」は今まで見てきたように、『紫式部日記』ではある程度高い敬意を表すが、『四条宮下野集』では受身の身分が、『紫式部日記』に比べて低くなるなど、それまでよりも敬度が低くなっている。『讃岐典侍日記』では「きこゆ」は1例も見られない。このことから「きこゆ」は時代が下がるにつれて受手の対象身分が低くなっていき、衰退していく様子が見える。

「きこえさす」は『紫式部日記』と『堤中納言物語』に用いられており、『四条宮下野集』と『讃岐典侍日記』には用例が見られない。「きこえさす」は「きこゆ」より高い敬意を表すが、「きこゆ」よりも先に用例が消えていく。

「たてまつる」は四作品すべてに見られるが、『紫式部日記』に比べると、『四条宮下野集』や『讃岐典侍日記』では、その使用頻度が低くなっている。また、使用対象も、『紫式部日記』などに比べると、広がっているように考えられる。

「まうす」は『堤中納言物語』と『四条宮下野集』にだけその用例が見られ、『紫式部日記』や『讃岐典侍日記』では用例が見られない。「まうす」はもともと、女性の手になる和文系の文章ではあまり用いられることがなかった。序でも延べたように、「まうす」の補助動詞用法は局限されており、和文系の作品ではまことにすくなく、神仏を客体とする動作、下級官庁・部局・官人から上級官庁・部局・官人へ向けて行われる動作、主従関係といった身分上の格差が極端に大であり、その支配下に隷属しているものとしてとらえられる客体に対する下位者の動作等の叙述に集中している。その「まうす」が、『堤中納言物語』や『四条宮下野集』では、以前までは「きこゆ」や「たてまつる」などが使用されるような場面において使用されている。

「きこゆ」「たてまつる」が中世に入って「まゐらす」に取って代わられる通過点にあたる時期に、「まうす」が使用されるなど、謙讓の補助動詞の用法が揺れ動いていたことが分かる。

「まゐらす」は『四条宮下野集』と『讃岐典侍日記』に用いられている。特に『讃岐典侍日記』においては用例が一一例あり、謙讓の補助動詞用法の九七%を占めている。反対に「きこゆ」「きこえさす」「まうす」は用例が見られず、この作品が成立した頃には、「まゐらす」に取って代わられていたことが分かる。

謙讓の補助動詞「きこゆ」「きこえさす」「たてまつる」「まうす」「まゐらす」の用法について、「きこゆ」「きこえさす」の「きこゆ」系の語に代わって「まゐらす」が用いられるようになったことが、あらためて確認できた。

また、用例が少なく、確定的なこととは言えないが、「きこゆ」系の語から「まゐらす」に変化する、一一世紀半ばから一二世紀初頭にかけての一〇〇年程の間に、あまり和文系では用いられない「まうす」が用いられたりするなど、謙讓の補助動詞用法がかなり揺れ動き、変化したと考えられる。

などが使用されるような場面において使用されている。

《註》

註1、「紫式部日記」 中野幸一校注 日本古典文学全集

集18 小学館（一九七一・六）

註2、「堤中納言物語」 新日本古典文学大系26 岩波書

店（一九九二・三）

註3、「四条宮下野集全釈」 清水彰著 笠間注釈叢刊

1 笠間書院（一九七五）

註4、「讀岐典侍日記」 石井文夫校注 日本古典文学

全集18 小学館（一九七一・六）

註5、「源氏物語の謙遜語―補助動詞『聞ゆ』と『奉る』

について―」 和田利政 日本文学論究10